研究室だより

人事

渡邉守邦教授、三月三十一日をもって退職。

上野加奈恵助手、三月三十一日をもって退職。

川上麻里助手、十一月一日をもって文芸資料研究所助手に異動。

訃報

昭和二十八年四月から昭和六十二年三月まで三十四年間にわたり本学に奉職された三谷榮一先生が、平成十九年八月二十九日、九十六歳でお亡くなりになられた。先生は『狭衣物語』研究の第一人者であられ、本学において多くの人材を育てられた。謹んでご冥福をお祈りいたします。

特別講演会開催

平成十九年度国文学科特別講演会

平成十九年十二月七日（金）

午後二時四十分～四時十分

香雪記念館一階大教室

「『平家物語』と武士の精神」

青山学院大学文学部日本文学科教授　佐伯眞一先生

卑怯な振る舞いをしないという「武士」に関する通念を、豊富な例を挙げてくつがえしつつ、ひいて日本人論にもおよぶ興味深い講演内容に、聴講した学生たちは非常に感銘を受けた様子であった。

大学院研究会開催

平成十九年度後期大学院文学研究科国文学専攻研究会

平成十九年十一月十三日（土）

午後二時三十分～五時五分

本館三六一教室

一、大学院生の部

「大伯皇女論――『万葉集』巻二挽歌部所載歌の表現――」　博士前期課程一年　伊藤　好美

「逆接を表す『のに』に関する予測文法的分析に基づく一考察」　博士後期課程三年　水上　由美

二、教員の部

「内閣文庫蔵伝嵯峨本『史記』の表紙裏反古について」

渡邉　守邦　教授

「戦後文学の志をめぐって――「白日の記録」（亀島貞夫）、「戦中手記」（鮎川信夫）のことなど――」

栗原　敦　教授

今回は、大学院生二人の発表に加え、二名の先生方から日頃の研究の一端を披露していただいた。大学院生にとっても教員の研究内容や方法論を知る上で、大いに勉強になったことと思う。

〈編集後記〉

月日の経つのは早いもので、本学に十九年間奉職され、学科の重鎮であられた渡邉守邦教授が定年にて退職されることになった。先生は深い学識を備えられている上に、江戸文学の粋を体現されたような方で、野暮な振る舞いや発言を嫌われた。会議の席上でも余計なことは決して言わず、発言されるときは、ひとの気がつかないことを寸鉄のごとく短く述べられ、皆の蒙を啓かれることが常であった。

私も今年度、先生の大学院の講筵に連ならせていただき、本作りなどの実際の作業を教えていただく栄に浴することができた。そこで大変羨ましかったのは、多くの学生が先生を慕い、卒業後も先生の元に通ってくる人の多いことであった。そうした受業生の中から、研究者として活躍中の三名の方々に論文を、先生の大ファンであった三名の方々に「思い出」を執筆していただいた。先生の学徳を記念する縁となれば幸甚である。

（影山　輝國）